

少年院の先生

まみ

泥に塗れた石を磨き続ける
その泥も簡単には落ちない
そして完全に落ちることはない
それを知った上でも綺麗にしようとする
ただの石かもしれないのに
そんな姿を無駄だと思う自分もいた
確かに綺麗な石はいくつもあつたけど
でもそれは宝石ではない ただの石
自分の石も磨いてもらった
泥は少しずつ落ちていた
磨いてる姿で思い出せた
自分の石は色んな人に磨いてもらった
汚していたのは自分だった
それに気づいて意志が変わった
自分で輝かせてやると思った
この石が宝石になった時、きつと思ひ出す
本気で泥を落としてくれた
先生方のことを

(喜連川少年院)